

創世記の記録

第2部 創造主が造られた世界

V／人類の墮落

著／ヘンリーモリス

訳／宇佐神 正海

— 1976 年版 —

第2部 創造主の造られた世界

V 人類の墮落（創世記三章）

あの古いへび

神の六日にわたる創造の事業が完了した時、世界はどこを見ても、すべては「はなはだ良い」状態でした。秩序の乱れているものは何一つなく、痛み、苦しみ、病、生存競争、不協和、罪もなく、その上何にもまして、死もありませんでした。

しかし、現在、世界は、「はなはだ良い」とは言えない状態です。自然界では、すべてのものが滅びと崩壊の傾向をもっています。生命界においては、すべての生き物が老化と死に定められており、すべての動物に他の動物との絶えざる闘争や病との絶えざる戦いが課せられています。文化面においても、一つの文明が起ったかと思うと、しばらくすると他のものが取って代わり、やがて没落し、滅び失せます。精神的―道徳的領域においても、誰でも善をするより悪をする方が容易であること、また下へ押し流される方が、戦いながら向上するより楽であることを見いだしています。世界は憎しみ、犯罪、戦い、公害、利己心、墮落など、

あらゆる種類の悪に満ちています。神の完全な創造に何か悪いことが起こったに違いありません。

聖であり、愛である神によって創造された世界に悪が存在するという問題は、長い時代にわたって哲学者や神学者の心を悩ましつづけてきました。もし、神が全能で聖なる方であるなら、なぜこのようなことを許されるのでしょうか。実際、どうして悪が起るような事態がもたらされたのでしょうか。

このような問いに対する簡単な答えはありません。事実、無神論は、世がこのように悪いのは神が善でない（悪が行なわれるのを許容しておられる）か、全能でない（悪を矯正したり除去できないから）かのいずれかであることを証明しているという悲観的信仰に基づいています。二元論的哲学は、善の原理と共に宇宙には悪の不滅の原理があると提案してこの問題を解決しようとしています。

しかし、このような答えは、もちろん聖書的でもないし、人の心の必要を満たすものでもありません。神は全能で、完全に義なる方です。したがって、神御自身による啓示だけが、この世における悪の起源とその重大さを私達に理解させることができるのです。

この問題に対する唯一の真実で論理的な答えが、創世記三章に見いだされるのです。使徒パウロはこの部分を参照して、「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、――それというのも全人類が罪を犯したからです」（ロマ五・一二）と述べています。後で、パウロは「それは、被造物（実際は創造）が虚無（または無益）に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物（創造）自体も、滅び（文字通りには崩壊）の束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています」（ロマ八・二〇）

二二」と述べています。

しかし、人が世界に罪をもちこむ前に、人に罪を犯させる別の要因があつたに違いありません。なぜなら、このような方向に人を導く性質はまだ人の中にはなかったからです。それゆえ、私たちはまず、この誘惑の入れ物であつたヘビの性質を考えなくてはなりません。

三章一節 さて、神である主が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であつた。蛇は女に言った。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」

アダムが審査し命名した野の獣のうちに、その体の色は光り輝いて美しく、動きがなめらかで上品な、最も魅力的な一匹の動物がいました。さらにこの動物「ヘビ」は他のどの動物よりも賢かつたのです。純真な女は、魅惑的で下心のある動物に目をくらませられ、すぐに道をふみはずさせられてしまいました。

私たちは、ヘビが人の言葉を話す能力やエバをだますすばらしい能力をもっていただろうかという困難な問題を考える前に、まず、ヘビの体を用いた悪霊の性質を調べなくてはなりません。この出来事は、「話をするヘビ」の単なる伝説以上の何ものかを意味していることは明らかです。聖書は後に例の「古いヘビ」を悪魔そのものと同一視しています（黙一・二九、二〇・二）。この悪魔は、神に反し、また人類に対する神の計画に敵対する天使の反逆を長い間、導いてきたのです。

前に述べたように、天使の軍勢（「使者」の意）は、恐らく創造の第一日に、神の御座の周りの色々な奉仕をするために創造されたのでしょう。天使たちには色々な階級があり、また権威の座すなわち「主権と力」

が与えられていました。これらの創造された霊的存在のうち最も偉大であつたのはルシファー（明けの明星）と呼ばれる天使であつたことは明らかです。

ルシファーに関してはイザヤ書一四章一二―一五節に語られています。このくだりはよこしまな「バビロンの王」に対する預言的警告の文脈中にあります。しかし、預言者は、地上を支配している専制君主を非難するにとどまらず、王の肉体と権威を支配し、利用していた悪意ある霊を公然と非難しています。このくだりでなされた宣言は単に地上の王に対するものとしては決して正しくありません。この同じ力に満ちた霊はエゼキエル書二八章一節から一九節の文章でも同様に述べられています。この文は将来出て来る他の地上の支配者、この同じ悪霊にとりつかれたツロの王をさして述べ、その後で、神の全被造物の中で最も地位の高い存在で神の御座を占める「油そそがれた守護者ケルブ」として語りかけられています。

神はこのいと高き天使に対しても創造された被造物であることを語り（エゼ二八・一三、一五）、彼もまた、他のすべての力ある天使も「仕える霊であつて、救いの相続者となる人々に仕えるために遣わされた」（ヘブ一・一四）ということを確認に知らせました。ちょうど神がすべてのものを創造された時（創一・三）のように、彼の状態は完全でした（エゼ二八・一五）。そして、人間が造られた後もしばらくの間完全な状態に留まっていた。ルシファーは、聖書にある通り神の完成された創造において、「天と地とすべての万象」（創二・一）は、すべて非常に良かったので、創造後のある期間は罪を犯しませんでした。私たちがすでに検討したように「天の万象」には、星々と共に天使も含まれていました。

しかしながら、このすぐ後で、自分の美しさの故にルシファーの「心は高ぶり」その輝きのために自分の知恵を腐らせてしまいました（エゼ二八・一七）。神はルシファーを確かに造りになったと彼に告げられま

したが、ルシファアは神の言葉にいくらか疑いをもつようになり、イザヤ書一四章一四節で「いと高き方のようになろう」とあるように、神になることができるかも知れないと思ひ違ひをするに到りました。ルシファアは明らかに、自分と神は同じ存在だと考えたのです。したがって神に対する反逆に成功して神を打ち負かせるかも知れないと考えたのです。

おそらく、自分も神も本当は「創造された」のではなくて、神御自身も他のすべての天使もある自然過程によって、原始の混沌とした状態から生じてただけだと推論したことでしょう。すべてのものは何らかの方法で、以前の物質から発達（または「進化」）してきたのであって、あらゆる知恵と美に満ちた自分が、天使の階級制度では、神の下に置かれたのは、たまたま時間の差ゆえに起こった出来事に過ぎないということです。

サタンがかつて、このようなばかげた考えを抱いたかも知れないということを誰も驚いたり疑ったりしないように、同じばかげた考えが厳粛な事実として今日でさえ世界の知識人である指導者に信じられ教えられている事を思い起こすべきです。彼らは、この複雑な宇宙は原始の混沌とした状態から自然の過程により生じたので、宇宙の実体は、自立、自存、自己発展で、人は「神」であるという実に常軌を逸した考えをしています。サタンは明らかに「全世界を惑わす」（黙示二二・九）者であり、彼は自分の「王座を神の星々のはるか上に上げる」ことができる真剣に信じ、まず第一に自分自身をだましてしまいました。多くの他の天使たちも彼の反逆に従ったことでしょう（黙二二・四、九）。

「不正が彼の中に見いだされた」（エゼ二八・二五）のでサタンは「稲妻のように天から落とされました」（ルカ一〇・一八）。神は「サタンを地に投げ出し」（エゼ二八・一七）終局的には、サタンを「永遠の火に」（イザ一四・二五、マタ二五・四一）投げ込まれます。

神に対する敵意がサタンのうちに生み出された一つの要因は、確かに人類に対する神の計画であった可能性があります。人類は「神のかたちにかたどられ」、神に似るように造られ、また自分の種族を殖やすことのできる無比の存在で、この祝福はサタンにも天使たちにも、分け与えられていないものでした。こういう理由で神はサタンをすぐ火の海に投げ込まないで、サタン自身が墮落したように、人を誘惑できるようにサタンを地に投げ落とされたのかも知れません。

多分、サタンは彼の支配下にある天使の忠誠心と共に人の支配権と愛情を獲得すれば、天に戻って、神のみくらしいにつくことができるかも知れないと考えたことでしょう。こういうわけでルシファア「明けの明星」は、神と神のすべての目的に敵対して神をひぼうする「敵対者」また「告発者」であるサタンとなりました。そして、今や、サタンはエバに近づき悪事をそそのかすために、「野の生物」のうちでこの「最も賢い」もののからだに入って「かの年を経たヘビ」となりました。

悪霊は明らかに、ある条件下で、人のからだか動物のからだのいずれかに住み込んだり、「とりつく」（ルカ八・三三）能力をもっていて、サタンは自分の目的を果たすのに最も適したヘビを選びました。ヘビが元来直立できたのかどうかに関して多くの考えがあります。ある人はヘブル語ナハシュは元来は「かがやく直立生物」を意味したと考え続けています。この考えは、後でのろわれて（創三・一四）ヘビが腹ばいであるき、地のちりを「食べる」ように運命づけられたことと、進化論者が「痕跡的」脚と解釈している構造がヘビの骨格にあることから、恐らく支持されるでしょう。

エデンの園にいた動物、特にヘビが初めから何らかの方法で人と話をする能力を持っていたかどうかは未解決の問題です。もちろん、現在、動物のほえ声やなき声とヒトの知的、抽象的、象徴的会話との間には大

きな隔たりがあります。一度だけ、神がバラムのロバに話すのを許した時（民二三・二八）、動物の発声器官を、かつてそうであったように開かれました。幾人かの近代動物学者はチンパンジーに初歩の話し方を教えその能力を開発しようと努力しています。

他方、天真爛漫なエバは、エデンの園でエバの回りにいる動物たちが話すことができないことも知らなかったでしょう。したがって、ヘビが彼女に話しかけた時、警戒もしませんでした。聖書のどこにもこれ以上の説明も補足もないので、この出来事が起こったことについての解説は、人が意識下に斉一説をどの程度受け入れているかによると言ってもよいでしょう。

斉一論者の考え方は別にして、私たちが創造の初めにヘビが話す能力をもち、人と会話できた美しい直立動物であったと考えられない理由は本当は何もないのかも知れません。このように解釈すると、この文章のこの部分はますます信じにくくなるかも知れませんが、少なくとも理解しやすくなるでしょう。呪われた時に、人だけでなく植物と動物界に起こった生理学上の大変化は創世記三章一四―一九節で明らかです。そして、また、この程度の変化は、神の能力をもつてすれば起こる可能性があるのは当然で、明らかなことです。

聖書の意味がはっきりしない場合、独断的になつてはいけません。同時に、釈義上の基本的規準を忘れるべきではありません。すなわち、聖書は学者だけでなく普通の人も理解できるように書かれました。それゆえ、本文で言外の意味を示唆しているか、または、本当に意図された真の意味が何かを明らかにしていないならば、通常は文字どおりに取るべきです。

少なくとも、元来、高等動物は彼らの主人であつた人と直接思想を伝え合うことができた可能性があります。これが最も原文に合った自然な読み方です。アダムが名をつけた動物たちもたぶん同様に思想の伝達ができ、

人はそれら動物を友好的に支配すべきでした。

さらに、鳥類を除いてヘビ以外の動物はすべて、四足獣であつた可能性があります。アダムやエバと話す時、ヘビは強力な脊椎を、小さな足で支えて起こしたりまっすぐに保つという顕著な能力を持っていました。アダムの誘惑と墮落の後、神は、動物の脳の言語中枢の構造も含めて、動物の発声装置を変えられました。神はヒトと動物の間にもっと大きい隔たりを置き、人をだます悪霊に動物のからだが再び用いられるのを避けるためにこのようにされたことでしょう。ヘビのからだには言語機能だけではなく、ヒトと同じ目の高さで目と目を合わせて直立する能力を取り除くことさえして、さらにもっと大きな変革がなされました。

ここで、前述の解説は独断的にしようとしているのではないことをはっきりさせておかなくてはなりません。聖書にももちろんこのような解説が明白に述べられているわけではありませんし、疑いもなく、このような解説は、現代的な考え方ではなかなか受け入れられません。それにもかかわらず創世記の創造に関する原文の文脈上、このように解説することは不可能でも非論理的でもありません。事実、この原文を直接最も自然で文字通りの読み方をするとこのような解説になるでしょう。

いずれにしても、サタンがヘビを媒体として女に接近したのは有効な手段であつて、その狡猾さは比類のないものです。アダムに女が相談したり、忠告を受けることのないように、サタンはわざと女がただひとりである機会をとらえました。恐らく、園の美しい果物を実らせる木をほればれと見ていた時、サタンはエバもアダムもいまだかつて想像もしたことのないある考えを巧みにほめかしました。すなわち、その木の果実について「神はほんとうに言われたのですか」という疑問を可能にしました。換言すれば、「ほんとうに神様はそんなことを言われたのですか」でした。「素直に」神の命令を信じていたエバに対し、少しばかりにした

ような、親切にも「教えてあげる」というような態度に注目してください。その時以来、サタンとサタンの手下になった人間は同じ技巧を用いて大いに成功しています。

神のことばに問題があり得るというこの最初の暗示は、引き続いて彼らが考えていたほど、神は善良で慈愛深い方ではないという推論へと導きました。「神は、あなたがたに園のすべての木から食べることを許してはおられないのですね。あなたは神があつた木をなぜそんなふうに差し止めておられるのかとは思わないのですか」と。

もし、罪を犯した個々の問題を注意深く調べると、私たちは神のことばか、神の善意またはその両方を疑い始めたことが罪のきつかけになったことを見いだします。これは、サタンが始めから用いた常套手段です。このうそをもって、サタンはまず自分自身をあざむき、ついで人類の祖であるアダムとエバに試み成功を収めたので、それ以来同じうそを用いつづけているのです。

三章二、三節 女は蛇に言った。「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけなからだ。』と仰せになりました。」

ヘビがエバに取り入ろうとして語ったことに対するエバの反応は、もちろん、確かにまちがっていることを彼女に示すものでした。神は彼らに園の木の実を食べてもよいと言われました。彼らに差し止められているのは園の中央にあるただ一本の木だけでした。

しかしながら、ヘビの示唆した誤りを矯正しようとしているさ中においてさえ、ヘビの質問がエバを死に追いやる効果をもっていたことを彼女は示したのです。答えの中で、エバは神のことばに実際に付け加えたり差し引いたりしました。その結果、神ご自身について実際より物階しみる、要求高い方だと思わせられてしまったのです。彼女は、神の園のどの木からでも思いのままに食べてよいと言われたのに「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです」と言いました。神は、彼らに、園の中央にあるただ一本の木の実だけはとって食べてはならないと言われました。しかし、エバは「それに触れてもいけない」と付け加えたのです。神は、もちろん、木の実に触れることを禁じませんでした。したがって、さらに制限されているというこの思いはエバの中に啓発された憤慨の単なる産物でした。

神のことばを変えることは、それが近代の異端のような付け加えであっても、また近代の自由主義者のような差し引きであっても、常に危険です。全知の神は常に、言われた通りに、しかも、また意図された（申四・二、箴三〇・五、黙三二・一八、一九）通りに信じ頼ることができます。そして有限な人が神のことばを変えようとする時、言い訳はたちません。このような場合は神からの責め（箴三〇・六）、または死（黙三二・一九）を来します。

三章四、五節 そこで、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」

まず、神の権威と善意に対する疑問をエバに持たせ、神のことばに付け加えたり、差し引いたりして、今

やサタンは「死ぬ」の代わりに「あなたは決して死なない」という準備が整いました。神がアダムに警告し、アダムがエバに告げていた、この木の実を食べると死を来すという事実は、骨抜きにされてしまいました。神の警告に対し、サタンが示唆したことは、彼らがあまり多くのことを学ぶのを神が恐れたためだということでした。神のことはを変えることで満足しないで、今やサタンは神のことはあくどく否定し、神をうそつきと呼びました。

「あなたがたは神のようになります。」これはサタンを破滅に導いた誘惑と同じで（イザ一四・一三―一四）、エバにとつて同じように抵抗できない誘惑でした。もちろん、人が神のことはを否定し始めたり、または神の善意あるご支配に疑問を持ち始めたりするとすぐ、人は自分を事実上神の位置に置き始めるのです。そして、自分のために真理と正義の基準を自分で定めるようになります。それこそサタンが初めから探っていた狡猾な意図でした。そして、今やエバは適度にその考えが和らげられ神性と全知が今にも自分のものになるという公然とした主張にもはや逆らうことのできない状態になりました。

もちろん今日、同じような誘惑が繰り返し繰り返し、いろいろな姿をとつてもたらされています。私たちは実際にしばしばエバと同じ方法で反応します。事実、私たちは神から絶えず受けている良い物と共に、悪い物をも体験的に知りたいと望んでいます。もっと正しい方法はエバがしなかったこと、すなわち、神の言葉にとどまり信仰を保つことによって悪魔に抵抗することです。「これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます」（エペ六・一六）。

ある意味でサタンの約束は真実でした。彼らの目は開かれ、彼らは善悪を知るに至りました。しかし、神のようではありませんでした。サタンは大した詐欺師です。そしてサタンのごまかしはその中に半分位の真

実を含んでおり、さらに曲解された真実が含まれているので、実に効果的です。他方、神は完全に真理であるばかりではなく、ただ一つの真理です（ヨハ一四・六）。

誘惑にかかわるこの部分を終わるに当たって、現代の人々がサタンの誘惑に疑問を持つにもかかわらず、新約聖書の記者たちはその権威と史実性に賛成の印を押していることを銘記すべきです（Ⅱコリ一・三、Ⅰテモ二・一四、ヨハ八・四四を注意せよ）。

人の犯した最初の罪

次の数節は聖書中最も大切なものの一つです。そこには人が創造された時の罪のない状態での神との交わりから、罪に陥って神から隔離された現状に至った悲劇に関する記録があります。先に強調したように、人はロボットの存在として創造されたのではなく、神を愛するか神を退けるかを、自分で選ぶ道徳的能力をもった自由な存在として創造されました。人が罪を犯す必然的理由は少しもなく、人が罪を犯そうと思えば罪を犯すことができました。神は人を完全なものとして造られ、人の必要が完全に満たされるまたない環境に人を置きました。人は、現在私たちがもっているように生まれながら罪を犯す性質はありませんでした。したがって創造された人は罪を犯すように働きかける外部の圧力に完全に抵抗することができました。

それにもかかわらず、悲劇的にも彼が罪を犯したというのが事実で、それによって、世に罪と死がもたら

されました。「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、それというのも全人類が罪を犯したからです」(ロマ五・一二)。「アダムにあつてすべての人が死んでいる」(一コリ一五・二三)のです。

もし罪を犯すなら、生物学的生命の死を来すとアダムは宣告されていたので、彼の子孫もまた、死の原理を組み込んだ生命の原理を受け継いでいます。子どもは受胎と同時に死が始まります。そして、死の原理が生命の原理に打ち勝つて、結局人は死にます。

死への傾向が、すべての人に受け継がれているので、また同様に罪を犯す傾向もすべての人に受け継がれているのです。アダムの子孫は、例外なしに善悪を自覚する年齢に達する前に、實際上悪を選択し行なっています。人はよく考えた上で罪を犯す罪人となったのです。このことは、人は罪深い性質を受け継いでいるので、実際に罪に導かれることを示しています。こういうわけで、「死が全人類に広がった……それというのも全人類が罪を犯すように」なったからです。人は誰でも、アダムの犯した罪のためだけではなく、自分自身で故意に犯した罪のために死という神のさばきの下に置かれているのです。

三章六節 そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。

エバが自分の心と感情を、神への疑いと神のようになりたいというサタンの暗示に委ねて、禁断の木を見つめていると、その実は実に美しく非常に好ましいものであるように思われました。非常に魅惑的なこの実

の働きかけは、今日、人が実際に直面するあらゆるタイプの誘惑の特徴と實際上明らかに同じであることは注目に値します。

彼女にとって、その木は①食べるのに良く、すなわち、生理的に肉体的に食欲をそそるものであり、②目に慕わしく、すなわち、感情―美的感覚に訴えるもので、③賢くする。すなわち、精神と霊に訴え、そして、知的かつ霊的洞察力に関する誇りに訴えるものでした。

この三つの描写はヨハネの手紙第一、二章一六節の輪郭と完全に対をなしています。「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの傲慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。」このように誘惑は、肉体、魂または、霊のいずれか、またはエバの場合のようにこれら三つに対して同時に向けられます。ヤコブは誘惑の原因は、これら三つの側面すべてであることを強調して「地に属し、肉に属し、悪霊に属する」と述べています(ヤコ三・一五)。

もちろん、ある日、第二のアダム(イエス・キリスト)は世に生まれ、私たちと同様にすべての点で誘惑されなければならぬはずでした(ヘブ四・一五)。彼の公生涯がまさに始まるうとしていた時、彼は「御霊に導かれて荒野におり、四十日間、悪魔の試みに会われました」(ルカ四・一、二)。ここでも誘惑は三つの面、すなわち、①空腹の時にパンを提供する(ルカ四・一、二)という肉体的食欲に訴える。②世と世の王国のすべてを所有させる(ルカ四・五)という貪欲で審美的な情緒的欲求に訴える。③天使の特別な保護の下に最も知的霊的にすぐれたものとして全世界が認めるようになる(ルカ四・九、一二)という霊的誇りに訴える、という三つの面からなされました。

主イエスがサタンに打ち勝った方法こそ、私たちも悪いものに打ち勝ちうる方法で(一ヨハ二・一三、一四)

実に大切です。それは神のことばにある約束と適切な教訓を自分自身とサタンに言い聞かせることによつたのです。木の実がエバにもたらした、肉体、魂、霊への誘惑を好ましく思い、神のことばを信じて従う代わりにエバは質問を発し、神のことばを疑い、ついで修正し、ついに神のことばに反逆しました。

すべての罪人の原型として、エバはアダムを同じ罪にあずかるようにさせなければと思ひました。そこで、エバはその木の実をさらに摘み取つて夫のもとに持つて行き、自分と同様に食べるように強要しました。疑いもなくエバはヘビが用いたのと同じ主張を用い、さらにエバがそのおいしい木の実を食べて害を受けなかつたということも個人的証明として付け加えたことでしょう。

しかしながら、「アダムは惑わされなかつた」（イテモ二・一四）という使徒パウロの記事では、アダムが故意に神に反抗していることを十分承知していたことを意味するのか、それとも、サタンがあざむいて攻撃した最初の人はアダムではなかつたことを意味するのかを完全に明らかにすることはできないかも知れません。パウロは「女は惑わされてしまい、あやまちを犯しました」と言っています。これらのことばは、主たる責任は女に置かれているように思われます。女は呪われ、男に従うように説明されています。なお、ヘビはアダムを最初にだまそうと試みましたがうまくゆかずエバに切りかえたというヒントを見いだすことさえできません。

アダムはエバに対する愛ゆえに、彼女と共に罪を犯し、神のさばきにエバだけを当たらせない方法を選んだのではないか。かなりの人々はこのように考えています。この解釈は、「キリストもまた教会を愛し、教会のためにご自身を与えた」（エペ五・二五）という真理を示唆していて、原型として一致しているように思えます。しかし、この動機は一見アダムが罪を犯すに当たつて高貴であつたように見えますが、聖書はこのよ

うなことを意味していません。アダムの罪は邪惡で言い訳のできないものでした。事実、エバの罪によつてではなく、アダムの罪によつて「罪は世にはいり、罪によつて死は来た」のです。人類の未来にかかわるすべては、「アダムにあつて」（イコリ一五・二三）エバさえ「アダムをもとにして」（イコリ一一・八）造られました。アダムは人類の真の契約の頭（かしら）で、「ひとりの人の不従順によつて多くの人が死んだ」（ロマ五・一五）のでした。

三章七節 このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作つた。

アダムとエバが、善悪を知つて神のようになり、知恵を得るとヘビは約束しました。しかし、神のようになり知恵を得る代わりに、彼らがどんなことをしたかを実際に悟るとともに、恥の恐ろしい感覚が彼らを取り囲みました。神の命令は「ふえよ。地を満たせ」であつたことを思い出した時、彼らは人間の生命の源がいまや彼らの不従順によつて墮落してしまつたことを悟り、彼らは鋭い裸意識を持つようになりました。彼らの子孫はみな、反逆の種で汚染され、したがつて、彼らの罪の感覚は、特に自己の生殖器官に向けられました。その結果、彼らは突然生殖器官をお互いから、また、神から隠したいと望むようになりました。

彼らは、あわててイチジクの葉で不細工な腰の覆いを作りました。しかし、もちろん、このような腰の覆いでは神に対する反逆の罪を隠すことは全然できませんでした。同じように、私たちの義は、今日みな不潔な着物のようで、罪深い心を隠すのに役立っていません（イザ六四・六）。むしろ私たちに必要なのは、神だけが私たちに着せることのできる（創三・二一）「救いの衣」「正義の外套」です（イザ六一・一〇）。私たちは、自分で造つたり達成したことによつて神のさばきを免れることは決してできません。

三章八、一〇節　そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。神である主は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」彼は答えた。「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました。」

もはや、アダムとエバは彼らを創造された神との交わりを楽しむことはできなくなりました。むしろ、彼らは、「身を隠し」ただけでなく神を避けるための言い訳さえ作り出すようになりました。

しかしながら、アダムとエバがしてしまったことに対して差恥心をもっていた事実は、彼らが救われる可能性を持っていたことを示していました。罪人が悪いことをして、差恥心を感じないときには解決策はなく、たださばきと刑罰があるだけです。聖書は彼らが「主なる神の声」を聞いた時、恐れたと言っています。神のことは指導と慰めのために人間に与えられています。罪の自覚をもたらず働きもあります（ロマ三・二一、Ⅱテモ三・二六）。

神は「そよ風の吹くころ園を歩き回られ」ました。多少無造作にこのことが述べられているのは、これが通常の出来事であり、おそらく主が彼らと会って交わる、日々の定められた時であったことを示しています。神が人と交わられた時、完全な人の姿をとっておりましたが、これは繰り返しかまたは、断続的な神の顕現でした。顕現に当たっては、神のことは受肉前のキリストが御自身のかたちにかたどって創造された人と交わるためにご自身が人の姿になりました。

神と人との交わりがどれくらいの間続いたか、私たちは知ることができません。少なくとも、天において

サタンが反逆し、追放されるのに十分な時間はあったことでしょう。しかしながら、アダムとエバが子をもうけるのに十分な時間ではなかったのです。恐らく数週間であつたと思われませんが、確かではありません。

しかし、この際、日々の交わりを期待して待っているアダムに会う代わりに、主なる神は会うのを避けようとして木の陰に隠れているアダムに出会いました。しかし神がアダムに呼びかけられた時、アダムは神から隠れることができないことがわかりました。したがって、裸なので隠れていたという言い訳にならない返事をしました。

こういうことは以前にはなかったことでした。しかし、今や強い裸意識が神に対して生じていたことは確かでした。イチジクの葉で作った腰のおおいも役に立ちません。アダムはそれがわかっていました。最も悪質な罪がアダムの肉体に入り、やがて生まれてくるすべての子孫を汚染することになりました。

ところで、ついながら、ある人類学者や利己的な知識人が述べたてているように裸の恥は文明人の習慣によつてもたらされた人為的な抑制ではないことをここで述べておきます。裸の恥の源はこの罪意識にありました。したがって、罪に対するすべての感覚を失うほど、良心がかたくなになった時だけ、裸の恥に対する感覚はなくなります。

また、天国で着物を着るということも考えるべきです。「天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を着て」（黙一九・二四）とあり、また、栄化された人の子がヨハネによつて「足までたれた衣を着て」（黙一・一三）と描写されています。罪のなかったエデンの園での短い期間以外、自分の夫または妻以外のだれの前でも、裸は恥ずかしいことだと聖書は教えています（創九・二三、出三二・二五、黙三・一八参照）。

三章一―三節 すると、仰せになった。「あなたが裸であることを、だれがあなたに教えたのか。あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか。」人は言った。「あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。」そこで、神である主は女に仰せられた。「あなたは、いったいなんということをしたのか。」女は答えた。「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べたのです。」

アダムが自分は裸であると言ったとき、アダムは実際には、自分の罪深い不従順をさらけだしていたのです。なぜなら、もし彼が罪を犯していなかったなら彼は罪の意識を持つてはいなかったはずだからです。それゆえ、神はすぐ彼に禁断の木の実を食べたかどうかを問いただし、この点を指摘しました。こうして、罪を告白し、赦しを乞う機会を彼に与えました。もしアダムが悔い改めて罪を告白していたならば、刑罰がいくらかやわらげられたかどうかは知るよしもありません。しかし、愛とあわれみの神は、その性質上、そうしたと思われます。しかし、事実アダムは罪を告白しなかったのです。

神が、彼らに問い質し始めた時、罪の思いは彼らの心に急速に広がっていったので、アダムは妻を非難し、エバはへびを非難しました。そうして共に個人的罪の意識をもとうとしませんでした。事実、アダムは神御自身を非難しているように思われることさえ言ったのです。これらすべては、「あなたが私に与えて下さった女」のゆえであると強調して、事実上アダムは神御自身を非難している意味のことを言いました。神の善意をほめたたえる代わりに、問題を持ち込んだ神を非難しました。なんとばかげた、そして罪深いことでしょう！また何と私たちに似ていることでしょう。

もちろん、神の問いは情報を得るためではなく、アダムとエバに罪を認めさせ、悔い改める勇気を与えることにありました。しかし、彼らは発見されたのを残念がり、結果を恐れていたことは間違いありませんが、真の悔い改めの兆候もなく、むしろ自分を正当化しようとしただけでした。したがって、刑罰を教え始める以外に主の取られる道はなかったのです。しかし、その罰はこらしめと共に矯正的で救済的な罰でした。

滅びの束縛

三章一四―一九節には、通常、神ののろいと言われている事柄が記されています。実際にいくつかののろいがあります。また、のろいの局面、すなわち、動物界に対するのろい、へびに対するのろい、女に対する特別なのろい、アダムとその子孫に対するのろい、土地そのものを構成しているあらゆる構成元素に対するのろいが含まれています。

アダムは地を支配するように定められており、しかもアダムが死に始めたので、アダムの支配もまた「死」に始めたのでした。その時から、「私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています」(ロマ八・二三)。この状態は使徒パウロによって、「墮落の束縛」(または、もっと適切に言うところ滅びの束縛)と呼ばれています。「なぜなら、被造物が虚無(または空虚)に服した」(ロマ八・二〇、二二)と書かれています。

ある意味で、のろいの主な三つの面は、一章に書かれている創造された三つの基本的実体に対応しています。

宇宙の物質的構成成分は最初に創造され（創一・二）、それから、動物である意識を持った生命の実体（創一・二二）、そして最後に、人のうちにある神の霊的性質（創一・二七）が創造されました。創造の週の大きな出来事は、創造された物を色々な個々の種類の自然界と生物学的「身体」（Ⅰコリ一五・三八―四一）へと形成し、配列し、編成する過程から成っていました。

のろいはまた、物理的構成成分（創三・一八）動物界（創三・二四）と人（創三・一六）にもやってきました。なぜなら、これら三つの物理的、知的、霊的特質は人に共通した成分で、人は神のもとを去ったのです。個々ののろいの宣告に関しては、神は罪の特別な行為を犯した時間的順序にしたがって、サタン、ついでエバ、それからアダムの順でなされました。しかし、アダムとエバにとつては、のろいの下に服せられながらも最終的に赦しについての「望み」（ロマ八・二〇）がありました。しかしサタンにとつては、のろいは決定的で取り消しのきかないものでした。サタンは天において神に反逆しただけでなく、今や彼の反逆の精神を人にも感染させたのです。

三章一四節 神である主は蛇に仰せられた。「おまえが、こんな事をしたので、おまえは、あらゆる家畜、あらゆる野の獣よりものろわれる。おまえは、一生、腹ばいで歩き、ちりを食べなければならぬ。」

動物としてヘビは、「あらゆる家畜、あらゆる野の獣よりも」最ものろわれたものとなりました。それは、ヘビ自身が直接罪を犯しているからではなく、むしろヘビは人の墮落の道具であり、またサタン自身の最終的破局を示すものとして、絶えず人に覚えられていることによるのです。以前ヘビがどんなに美しく、また

姿勢がよかったとしても、それから後は腹ばいで歩き、すべての人に恐れられ憎まれる対象となりました。

もちろん、文字通り「地のちり」を食べるのではなく、ただヘビは目の前にあるちりのついたままのものを食べなくてはならないという意味です。これは主として屈辱的なさばきと墮落を言語を用いて生き生きと表現しているだけです。

神が不正であるとだれも不平を言わないために、動物としてのヘビはその身体がよこしまな思いの道具として用いられたからといって非難されるべきではありません。しかし、私たちは神が被造物を自由に用いる權威をもっていることを覚えなくてはなりません。「陶器を作る者は、同じ土のかたまりから、尊いことに用いる器でも、また、つまらないことに用いる器でも作る権利を持つていないのでしょうか」（ロマ九・二一）。動物は各々特別な生活様式にふさわしく、また、この生活様式に適する特別な形態をもって造られました。ヘビ以外にも多くの「はう生物」がいました。そして今や、神はヘビをも象徴的意味ではうもの群に加えられるしました。しかし、動物としてヘビはこの運命に対し、モグラやミミズと同じように神に対して恨みをいだくことはできません。

他のすべての動物は、一匹も罪を犯していないのに、この時点でのろいの下に置かれたことも併せ考えるべきです。ヘビはただ他のすべての動物以上にのろわれたのですが、その後「すべての獣」はそのすべての個体に「死の宣告」が下りました。各々の動物は人間の支配下に置話かれていました。それゆえ人が罪を犯した結果、死は全世界に入り、人の支配下にあるすべてのものに及びました。

三章一五―一六節 わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。

彼は、おまえの頭を踏み碎き、おまえは、彼のかかとかみつく。」女にはこう仰せられた。「わたしは、あなたのみごもりの苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで子を産まなければならない。しかも、あなたは夫を恋い慕うが、彼は、あなたを支配することになる。」

のろいは表面上へびに対して宣告されましたが、その真の打撃はへびの身体とその言葉を支配した悪意ある霊（悪魔と呼ばれた古きへび―黙一・二・九）に対するものでした。地球は初めに人の支配下に置かれました。神のことばの代わりにサタンのことばに従うように人を説得することによって、サタンは第一の男と女を味方につけることができ、したがって、すべての子孫も味方にできたと考えたことでしょう。彼らはサタンと同盟を結ぶだろうし、彼らの努力を得て悪い天使の軍勢は神を王座からひきおろし、神を征服するでしょう。サタンは今や「この世の神」（Ⅱコリ四・四）となりました。特に未来の子どもを産むはずの女は進んでサタンに従うはずでしょう。女は男を支配できることもすでに実証済みでした。男はだまされなかったとはいえ、女が男に食べるように言った時、食べてしまいました。サタンは驚くほどの子どもを産む潜在能力をもつ人間が、やがてサタンの支配下でサタンの命令に従う無数の従順な奴隷の軍勢を作ることができると思ったことでしょう。

しかし、もしこのような考えがサタンの心にあつたなら、全世界をあざむく者（黙一・二・九）であつただけではなく、彼自身他のすべてのものよりも最もだまされていたのです。まず、「わたしは、おまえと女との間に、敵意を置く」と神は言われたので、女はサタンと同盟を結ぶことはできなくなりました。「あなたは夫を恋い慕うが、彼は、あなたを支配することになる」と言われたのでは、女が夫を支配することもないでしょう。また、

神は「わたしは、あなたのみごもりの苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで子を産まなければならない」と言われたので、妊娠と出産は容易ではなくまたすみやかでもないはずです。

勝利はサタンが思ったほど容易でないばかりか、最後にサタンは完全に撃退され滅ぼされてしまうのです。「男のたね（精子）」によらない人が来る。それゆえ、彼はサタンの支配下にはない。彼は唯一の女のすえである。不思議な方法で受胎し、処女が子を産む。おまえは彼を大いに傷つけることはできるが、彼は完全におまえとおまえのすべての悪い野望を打ち碎く。」

三章一五節にあるこの偉大な約束は、原始福音（最初の福音）として長い間知られています。原始福音は究極的に救い主が来られ、勝利することを約束しています。それは人とへびとの間にある肉体的嫌悪という取るに足りない関係以上のものを伴うことは明らかです。しかも、これには恐らくある種の二次的な絵画的類比のようなものが含まれているかも知れません。その預言は、サタンが女のすえとして生まれる方に完全に打ち負かされ、その勝利の足の下に打ち砕かれる時がやって来ることを明らかに望み見えています。

しかし、最初に闘争の時があつて、へびが女のすえの「かかとを打って」むしろ見かけ上の勝利を治めているようにさえも見えます。この予告された闘争は、古代の伝説や神話に反映しています。これらは、命がけでへびや竜や他の怪獣と戦った英雄の物語などで満ち満ちています。初期の人々は星が形づくる外観によって星座を見極めました。そして星座の形、特にいわゆる「獣帯」やそれに伴って動く十分角（十分角とは獣帯「十二宮」の一つを十度ずつに三分割したうちの一つ）には同じ物語が繰り返されています。例えば、へびと戦っているヘラクレスの絵があります。手に小麦の穂を持った星座乙女座は約束された「女のすえ」に言及しているのかも知れません。動物の王レオは大きな飛んでいるへびの頭をつめで裂いているし、さそり

座は大英雄へびつかい座のかかとを針でさしているといったような例です。

これらの、またこれらと同様のことが古代神話に表現されているのは、原始のこの大いなる預言が尤もらしく誤り伝えられたに過ぎないと取るのが当たっているようです。初期から人類は、いつか救い主がやってきて悪魔を滅ぼし、ヒトと神を和解させると希望のあることを記録にとどめていました。

しかし、「へびのすえ」と「女のすえ」の両方で用いられているすえはだれを、また何を意味しているのでしょうか。もちろん「すえ（たね）」ということばは生物学的意味がありますが、直接ここで意味していることではありません。霊であるサタンも女も実際の「たね」を生ずることはできません。ただ男だけが肉体的に「たね」をつくることができます。従ってこれら二つの「たね」はもともと霊的・子孫について言及していたにちがいありません。

特にサタンのすえは、故意にまた意識的に女のすえに自らの敵意を置くものたちから成っているように思われます。彼らは特別の意味で敵（サタン）の性質にあずかり（ヨハ八・四四、エペ二・二・三）創造と罪のあがないに関する神の目的に敵対しようとしているのです。

一方「女のすえ」は、何よりもまず信仰を通して神との正しい関係を作りだす人々、父なる神の子たちについて言及しています。預言は王国の子たちと悪しきものの子たちとの間の長年にわたる闘争を予告しています。闘争はカインとアベルに始まり（マタ一三・三七～四〇、一ヨハ三・八～一二）世の終わりまで続いています（黙三・二七）。

前述の複数で肉体的意味での二つのすえに加えて、もう一つの意味があることは明らかです。へびの本来の一つのすえと女の本来の一つのすえがあります。前者は、やがてくる「滅びの子」（Ⅱテサ二・三）であり、

反キリストです。そのものに竜は力と位と大きな權威を与えます（黙二三・二）。

女の本来のすえはもちろん主イエス・キリストです。そして、闘争し、一五節にしたがってこのすえによって滅ぼされるのは、へびのすえではなくて、サタン自身です。

ここに明らかに人間の誕生に関する結論があります。事実一六節は女が子をみごもるときの悲しみを述べています。また、いつか処女が超自然的にみごもって子を生むことを意味しています。この約束のすえは、アダムの子孫が受け継ぐ罪の性質にあずかることなく世にきますが、まぎれもない人です。彼は他の人々のようにサタンの支配下に生まれることなく、したがって、道徳的戦いにへびをひき出すことができるはずで、遂に、その闘争で打ち傷を受けますが、彼はへびの頭を「打ち砕き」、サタンの働きを滅ぼし、捕らわれ人を自由にする勝利者として出てきます！

もちろん、この約束はイエス・キリストにあって成就しました。彼は十字架の上で死なれた時、致命的な傷を受けましたが、よみがえり、まもなく悪魔を火の池に投げ込むために再臨されます（黙二〇・一〇）。そして、「私たちの咎のために砕かれた」（イザ五三・五）彼の死で、神の義の正しい要求が満足させられたのです。キリストはアダムの罪のために死にました。それゆえにまた、アダムにあって罪を犯したすべての人のためにも死んだのでした。「アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです」（Ⅰコリ一五・二二）。

イザヤ書七章一四節には、このすばらしい預言を示唆するかのような言及があります。そこには次のように書かれています。「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」「処女」の前の定冠詞（へブル語で

は ha almah、ハ・アルマー）のハは、あらかじめ約束されていたものを示します。同様に、エレミヤ書三二章二二節には、「主は、この国に、一つの新しい事を創造される。ひとりの女がひとりの男を抱こう」とありますが、普通の妊娠であれば新しいことではないのです。

ヨハネが天に見た大いなるしるし（黙二・一～一七）は、預言の最終的成就を示しています。ここに出て来る女は、神のまことの民を象徴すると思いますが、一般的には選ばれた民イスラエル、特別の意味ではイエスの母マリヤを表わしていると思われます。男の子はキリストであり、童はあの年を経たへびで、彼を無き者にしようと呼びかまえていました。しかし、キリストは天に引き上げられ、真の子孫を滅ぼそうとする試みに失敗したへびは、怒って、「女の子孫の残りの者たち、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしをもっている者たちに対して、戦い」を続けています。最後に、童は千年の間底知れぬ所につなされ、遂には火の池に投げ込まれます（黙二〇・二、一〇）。

約束された子孫は、いつか、一人の女から生まれます。しかし、サタンには、どの女からか、またそれがいつであるかは明らかにされませんでした。サタンもエバも、最初は、エバの最初の息子がそうだと考えたかも知れません。その後、何世紀にもわたって、サタンは、約束された家系に生まれるすべての男の子、特に、特別の預言的重要性を持つ人物（例えば、ノア、アブラハム、ヤコブ、ダビデ）に対して、それらの誰かが約束された子孫ではないかと考えて攻撃を加え続けました。

女が存在をサタンは世を支配する手段としたにもかかわらず、神の恵みは女に対する特別な方法で現われました。しかしながら、女は、なお、特別のさばきを受けなければなりません。とはいえ、これですえ究極的には人間の益となるはずなのです。エバはアダムに対するのろいを共にしました。彼女もアダム

から出たものだからです。しかし、妊娠と出産に関して特別の重荷がさらに女の上に置かれました。みごもりの苦しみは「大いに増す」こととなります。彼女は「すべて生きているものの母」（創三・二〇）となるように定められていましたが、今や、彼女の子孫たちは、のろいの下に苦しむこととなります。この世への人間の出生には、特殊の苦しみが伴い、それは罪の恐るべき結果を常に思い起こさせるものとなるのです。

出産と母となることは、本来、神の喜ばしい賜物として与えられたものですが、罪と死を生み出した（ヤコ一・二五）隠された知識欲をもつことによって損なわれ、出産に当たって独特の苦しみを特色とするようになりました。さらに夫に依存することなく、夫から独立して、好ましい実を味わうという運命的な決定をした彼女でしたが、それ以後は、「夫を恋慕い、彼はあなたを支配する」こととなりました。

人類歴史の長く悲しい記録は、この預言的なことばの正しさを確証しています。女性の運命は、さまざまな種類の苦痛肉体的、精神的、また特に妊娠と出産の苦痛を担うものとなりました。一般的に言って、男性は女性を、彼女らの個人的感情や必要を十分配慮することなく、支配してきました。非キリスト教の文化や宗教では、そのような支配や屈辱は一般的であり、ごく最近まで、夫はしばしば妻に対する生殺与奪の権さえ持っていました。

このような過酷な「支配」は、言うまでもなく、神の意図からかけ離れたものでした。夫は家族の長であるべきですが、夫はその妻を愛し、いつくしむべきであり、彼女を「私の肉からの肉」と考え、「妻と結び合」わなければなりません（創二・二三、二四）。現代のウーマンリブその他の女性運動に携わる人々は、男性支配の政治やしきたりに伴う不正や過酷さと戦う点では正しいのです。しかし、法律、政治、文化、個人の関係において完全な平等を求め、聖書的でない極端な運動を進めることは避けなければなりません。

モーセの律法に示されたイスラエルの制度や、新約聖書の中で示されている女性の役割は、最高の幸福と完成に大いに役立つものであり、多くのクリスチャン女性が、そのことを実証しています。名目上のクリスト教国でも、また、多くのクリスチャン家庭や教会の中でさえ、夫と妻の正しい役割が、しばしばゆがめられています。このことを正すには、この問題について語られた神のみことばに素直に従うのが最善の道です（エペ五・二一～三三、コロ三・一八～二一、Iペテ三・一～七、Iコリ七・一～四〇、Iテモ二・八～一五、三・一一～一二、五・一四、テト二・四～五、ヘブ一三・四、マタ一九・三～一二等）。

出産に伴う女性に対する特殊なもののことは、神のご意思に従う女性には祝福ともなるのです。

イエスは、「女が子を産むときには、その時が来たので苦しみます。しかし、子を産んでしまうと、ひとりの人が世に生まれた喜びのために、もはやその激しい苦痛を忘れてしまいます」（ヨハ一六・二二）と言われました。とにかく、苦しみはありますが、母となることの喜びは、ほとんどの女性にとって非常に大きな幸福なのです。

出産の経験によって、女性はまさにキリストのひな型となります。「彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、彼は未長く、子孫を見ることができ、……彼は、自分のいのちの激しい苦しみのもとを見て、満足する」（イザ五三・一〇～一一）。「イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもともせず十字架を忍び……」（ヘブ一二・二）。

それゆえ、出産の経験は、人と人の統治するすべてに及んだ恐ろしいのろいからの神の「救出」の約束を描く美しい描写であり、それを思い起こさせるものとなるのです。まことに全世界は「うめき、苦しみ」ながら、大いなる救いと新しい世界の出現、最初の世界に対する神の輝かしい目的と約束を受け継ぐことを待つ

ています。「切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいる。」その出現の大いなる日に、「被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入る」（ロマ八・一九、二二、二三）のです。

「出産」の日は、それぞれ、そのような日を描写するものであり、約束するものです。したがって、そのことを教えられ信頼している女性にとって、出産は祝福の時であり、神に（または夫に）近づく時となり得ますし、常にそうなるべきです。苦しみは喜びのうちに消え去り、肉体の痛みをやわらげます。使徒パウロが、「しかし、女が慎みをもって、信仰と愛と聖さとを保つなら、子を産むことによって救われます」（Iテモ二・一五）と言っているのももつともです。

三章一七～一九節 また、アダムに仰せられた。「あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならない……とわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」

のろいの力はすべてアダムにふりかかってきました。しかし、言うまでもなく、「アダムにある」すべての男女、エバでさえアダムに含まれ、彼の支配下にある「すべての被造物」がのろいの下にありました。そして、これはとりもおさず「すべての被造物」をさし、明らかに星の領域も神のさばきの下に置かれました。しかし、このことはもっと直接的には、星々に住んでいた天使たちの先に犯した罪に関係していた可能性が

あります。「地はあなたのためにのろわれた。」ここで用いられている地は実際には地球をさし、自然界を形成している基本的物質を意味します。すべてのものが造られるものとなった「地のちり」である構成元素そのものが、崩壊と滅びの束縛の下に置かれました。

人が「耕し」かつ「守った時」（創二・五、一五）、以前には思い通りになっていた地が、今や思うように食物を生じなくなりました、それどころか、それは、いばらとあざみを生じ、「地から食物を取る」のに労苦と汗と涙を必要とするようになりました。そして人がどのように努力しても、ついには死が勝利し、人の体は地のちりに帰るのです。

神が、この時、いばらやあざみを実際に創造されたとか造られたというわけではなかったでしょう。神は直接、死を「創造」されたというのではなく、むしろ、生命と秩序の「安定状態」を保っておられた神が、その力の及ぶ範囲をせばめ、すべてのものが、次第に無秩序と死へ向かって崩壊するのを許されたことでしょう。同様に、この問題については不確かなことがたくさんありますが、神はただ、以前には「有益」だったある種の植物の構造を有害な特性を持つようになるのを許されたというのが、神のご性質によりふさわしいように思われます。今日観察される多くの崩壊過程のように、悪化は、初めは急速だったが、後には次第にゆっくりした過程になっていったと考えられます。今日の遺伝学上の知識からすれば、そのような変化は多分突然変異、つまり、いろいろな種類の生物の遺伝子機構の分子構造に起こったでたらめな変化です。

もし、植物を悪化する突然変異が起こったとするならば、それらが動物にも起こり得るだろうと考えるのは合理的で可能性があるようにさえ思われます。植物のなめらかな丸みをおびた構造が悪化していばらになったように、草食用にデザインされた歯や爪が、突然変異を起こして、牙（きば）や鉤爪（かぎづめ）になり、

タンパク質その他のものが次第に不足してくると共に、次第にある動物に肉食に対する食欲が生み出されたことも考えられます。

同様に、最初は土壌の保持や浄化の過程などで役立つようにデザインされた細菌やその他の微生物に突然変異が起こり、多くの場合、それらを摂取した他の生物に有害で死をさえもたらすことが証明されました。寄生虫やウイルスの系などもこのようにして発展してきたのかも知れません。

けれども、特に、人間の墮落後の道德の傾向を考えるならば、このすべてが必ずしも悪いとは言えません。事実、神は、アダムに、地に対する呪いは「あなたのため」であつたと言われました。罪に苦しみと死が伴ったことは、元初に創造された死のない安定した制度に何ら手が加えられないで、反逆が許され、勢いを得るにまかされるよりも良いことでした。死がなければ、人間は数においても悪においても際限なく増し加わったはずで、数に関するかぎりこの同じ事が実際に動植物に起こったはずで、その後、悪い天使と人に動植物を支配することがまかされ、その使用がゆだねられました。

それで神は、人間とすべての環境にのろいを下し、人間の罪の深刻さを認めさせるだけでなく、究極の破滅から自分自身と自分に与えられた支配領域を救い出す力のないことを認めざるを得ないようにされたのです。生きていくためにさえ労働が必要であつたことはそれ以上人が反逆しつづけるのを妨げ、かつ、サタンの誘惑時の約束はうそにすぎなかったことを彼に認めさせたことでしょう。このような状況は、人を神に対する悔い改めへと導き、自分の陥った悪い状態から、神がお救い下さるようにとの願いを起こさせます。

同様に、動物界や植物界でも、制限のない増殖は、病気や捕食や寄生などという新しい要因によって抑制されるはずで、もし墮落が起こらなかったならば、動物はきつと、繁殖の過程に神が加えられる制限によつ

て適正な数を一定に保ったことでしょう。けれども今や、神の介在が一時控えられ、のろいに伴うこれら間接的制限によって秩序が保たれ、世界は苦しみの内に、来るべき贖い主を待っていることをあかししているのです。

こうして、すべての「被造物が虚無に服し」しました。地は「衣のように古び」ついには「滅びてしまう」のです（ヘブ一・一〇～一二）。すべて肉なる者は、土から造られており、それは、崩壊と死の法則に従っており、「草のごとく……枯れ……散る」のです（Ⅰペテ一・二四）。生物も無生物も、あらゆる物は、ついには滅び、朽ち、年をとり、ちりに帰るといふ事実は、私たちが広く経験することです。

この傾向があまりにも普遍的なので、百年程前に、カルノ、クラウジウス、ケルビンその他の科学者によって、現在、熱力学第二法則と呼ばれている基本的科学法則にまとめられました。この法則は、すべての系は放置されるなら、崩壊し自滅する傾向にあると述べています。それは、「構造の解体」を意味するギリシャ語から「morpholysisの法則」とも言われています。時計であろうと太陽であろうと、物理的系はついには消滅します。生物は年をとり、そして死にます。種の遺伝的変化は、遺伝子の突然変異で起こります。突然変異は高度に秩序立った遺伝子に起こる突然で不規則な崩壊で、多くの場合、種自体の質の悪化や絶滅を来します。突然変異を別にしても、環境の悪化はしばしば、種の絶滅をもたらしています。

すべてのものが、創造の週に見られたように、「造られる」すなわち、複雑な体系に構成される代わりに、それらは分解し、単純なものとなっていきます。生命と成長の代わりに、崩壊と死が来ています。すなわち、進化ではなく退化なのです。

そういうわけで、これが無秩序と崩壊の一風変わった法則の真の起源であり、この法則が非常に重要な熱

力学の第二法則なのです。この法則に、世界にとって不都合なすべてのことへの理解のかぎがあります。人は罪人であり、神ののろいを地にもたらしたのです。人間へののろいは四重ののろいでした。①悲しみ―絶えざる失望や徒勞からくる悲しみ。②苦しみや痛み―家族のために生活の資を得ようと努める人を妨げる「いばら」に象徴される苦しみや痛み。③汗と涙―不良な環境との激しい戦いの「大きな叫び」である汗または涙。そして最後に④肉体の死―死は、人間のあらゆる努力に打ち勝って、人間の身体の機構を単純な地のちりの成分に戻してしまう。

しかし、キリストは、人の子、また第二のアダムとして、私たちのためにのろいとなられました（ガラ三・一三）。彼は「悲しみの人」（イザ五三・三）でだれよりも悲哀を知っておられました。彼はわれわれのために傷つけられ、砕かれ、懲らしめを受け（イザ五三・五）、いばらの冠をかぶせられて（マコ一五・一七）、苦悩の中で、汗が血のしたたりのように地に落ちました（ルカ二二・二四）。また、「激しい叫びと涙とをもって、祈と願いとをささげ」られ（ヘブ五・七）しました。そして遂に神は彼を「死のちり」（詩篇二一・二五）へと追いやられたのです。

こうして、彼が私たちのためにすべてののろいを負われたために、やがてもう一度、神の住みかが人と共になる時、次の言葉のようになります。「もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のが、すでに過ぎ去ったからである」（黙二一・四）。「もはや、のろわれるものは何もない。神と小羊との御座が都の中にあつて、そのしもべたちは神に仕え」礼拝する（黙二一・三）。

たとえば、のろいの完全な除去は、地を清め、新たにするためにキリストが再び来られるのを待つ（Ⅱペテ一二・一〇、黙二〇・一一、二二・一）とはいえ、彼はすでに「朽ちる物」によつたのではなく、彼の「尊い血」

によって、「変わることにない生けるみことば」によって、贖いのために代価を払われました（Ⅰペテ一・一八～二〇、二三）。それ故、ごくわずかではありますが、私たちは、信仰によって、この救いの結果をすでに自分のものとすることができます。私たちは、悲しみのうちにあって「常に喜ぶ」（Ⅱコリ六・一〇）ことができます、キリストの十分な恵みと完全な力によって、「肉体のとげ（いばら）」に耐えることができます（Ⅱコリ一二・七～九）。労苦は「昼も夜も……」やむことがなくても、主にある休みがあります（使二〇・三二、マタ一一・二八）。「彼の死のさまとひとしく」されても、私たちは「キリストの復活の力」を知っています（ピリ三・二〇）。

地そのものも、のろいの下にうめいています。約束された救いの証しを絶えず示しています。毎日、世界は暗闇に沈み、生命の光を失うように見えます。だが、太陽はのぼり、夜明けが訪れ、間もなく「義の太陽が上り、その翼には、癒しがある」（マラ四・二）ことを思い起こさせます。毎年、植物は枯れ、寒い冬がやって来ます。しかし、再び「いちじくの木や、すべての木を見なさい。木の芽が出ると……それを見て夏の近いことがわかります。」そのように、これらのことが起こるのを見たら、「神の国は近いことがわかります」と知らせるのです（ルカ二一・二九～三二）。

すべての被造物は痛みと悲しみに悩んでおり、私たちは、地に対するのろいと、パンを作り出すために必要な労苦を忘れることはできません。しかし、神は「とはいえ、ご自身のことをあかししないでおられたのではありません。すなわち、恵みをもって、天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満たしてくださったのです」（使徒一四・一七）。苦労や死が出生に伴うとしても、新しい生命は生まれ、希望は永遠にわきいます。

失樂園Ⅱ失われたパラダイス

三章の最後のこの重要な節は、美しいエデンの園から人が追放されたことを取り扱っています。神は愛のみ手をもって、神の子らのための完全なホームとしてエデンの園を用意されましたが、彼らは神を拒みしました。墮落した彼らにとってエデンの園は、もはや、ふさわしい所ではありませんでした。神の義は刑罰を要求しましたが、それ以上に、神の愛は、彼らに自分たちの失われた状態を悟り、救い主を求めさせるという教育的に企てられた状況を与えることを求めたのでした。

三章二〇節 さて、人は、その妻の名をエバと呼んだ。それは、彼女がすべて生きているものの母であったからである。

神が大いなるのろいをそのすべての側面と意味を合わせて宣告された時、神は来るべき贖い主について、さらにすばらしい約束を与えられました。アダムとエバが、彼らの罪とその結果としてののろいにもかかわらず救いを約束するこの「原始福音」の宣言を聞いた時、彼らは神のことばを疑ったり拒んだりすることなく、今度はこれを信じました。

「アダムはその妻が「すべて生きているものの母」だったので、その名をいのちを意味するエバと呼びました。こうして、アダムは子孫を持つだけでなく、この手段を通して救いをもたらす「女のすえ」を神がお遣わしになるという神の約束に対する信仰をあらわしました。神のみことばに対する真の信仰には悔い改めが先立ち、悔い改めが伴うものです。神がアダムに語られた時、アダムのサタンに対する態度もまた、自分自身に対する態度も明らかに変わりました。彼は自分の悲痛な間違いを心から嘆き、ただ自分自身を喜んで神の恵みにゆだね、ひたすら神の救いを信頼したのでした。確かに、エバも同様の心の変化を経験しました。それだけでなく、彼女は今や夫から独立して行動するより、夫に従うことを当然のこととして望むようになりました。」

当時子どもは一人も生まれていなかったのですから、エバは「すべて生きているものの母」であったという声明は、アダムが述べたことばではありませんでした。もし、子どもがいたとしたら、彼らは恐らく罪のない状態で生まれたはずですが、聖書はコリント人への手紙第一、一五章二節で、すべての人はアダムにあって死んだと教えています。この声明は、恐らくモーセが編集上の説明として後で挿入し書き加えたものでしょう。いずれにしろ、ある人が推測しているように、エデンの園の外の世界にアダム以前の人があったという教えを完全に拒否します。

注目に値する他の点は、アダムとエバがエデンの園に置かれて罪を犯すまで、そう時間はたっていないかったということです。神は彼らに「生めよ、ふえよ」と命じられました。そして、彼らと神の親しい交わりと従順の最初の状態で、彼らはもちろん、すぐこの命令に従おうととりかかったことでしょう。

死という有罪判決にもかかわらず、神は彼らが少なくとも子どもを生み彼らを養うのに十分な寿命を約束

しました。彼らは神のことばを信じて救われました。「すべて生きているものの母」として、エバは私たちの天的家庭のひな型となりました。「上にあるエルサレムは自由であり、私たちの母です」（ガラ四・二六）。

三章二節 神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。

彼らの信仰に応えて、神は恵み深く、裸をおおうおおいを用意して下さいました。彼らがイチジクの葉で造ったエプロンはまったく不適當でした。そこで神は「皮の衣を作り、彼らに着せて」（創三・二一）下さいました。多分、神が二匹の親しい友であった動物、恐らく羊を選び、目の前でそれらを殺し罪のない血が流されるのを彼らは黙って悲しげに見ていたことでしょう。彼らは、神が祭壇に血を流す事によってのみ、罪の贖い（罪のおおい）がなされることをひな型で学びました（レビ一七・一一参照）。もちろん、私たちにはわかりませんが、この経験は彼らに、約束された女のすえが全き贖いをなし人々の救いの備えをする前に、来たりつつある恐るべき戦いにおいて、最終的に御自身の血を流さなければならぬことを教えていたということも考えられるでしょう。いずれにせよ、彼らは彼らの二人の息子の悲惨な歴史を通してこの闘争の現実性をまもなく経験するはずでした。

この記録から得られる付随的な教えは、人間の墮落した状態では、裸に関する恥の意識はまったく適切なものだということです。現代のヌーディストや快楽主義者は、肉体の美や肉体をそのまま顕示する「自由」と「自然性」を主張していますが、彼らは、神ご自身が、わざわざ、最初の男女のために裸をおおう着物を作られたことを思い起こすべきです。

三章二二～二四節 神である主は仰せられた。「見よ。人はわれわれのひとりになり、善悪を知るようになった。今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように。」そこで神である主は、人をエデンの園から追い出されたので、人は自分がそこから取り出された土を耕すようになった。こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。

エデンの園は、アダムとエバが去ったのちも、ある期間、存在していました。いのちの木はなおそこに立っていて、人がその木の実を引き続いて食べることにないように、人は園から追放されました。すでに述べたように、この木の実が何であつたかはわかりませんし、この木の実のどのような素晴らしい医薬的效果が細胞の老化を防ぎ、それを用いる者に完全な健康を保たせたかもわかりません。しかし、神は確かにその能力をその木の実にお与えになることができましたし、神ご自身もそのことをあかししておられます。やがて、地が再び新しくされる時には、それは再びエデンの川に沿って植えられるでしょう（黙二・七、二一・一、五、二二・一～二二）。

二二節は、三位一体の神の内部での話し合いを思わせるものがあります。創世記一章二六節で、このような話し合いが人を創造する決断に関してなされたことが記録されています。そして、今や、エデンの園といのちの木から人を追放することも神の話し合いの上で宣言されています。この二つの節で、「主なる神が言われた」として神の唯一性が強調されていると共に、また神の複数性（「われわれ」）も強調されています。

神の話し合いは、人が「われわれのひとりのようになり、善悪を知るものとなった」ことを認めました。この声明は、ある人々が考えているように、皮肉やあざけりのことばではなく、悲嘆のことばです。人はかつては神の善のみを知っていましたが、今や、神のみことばを拒むことにつきものの悪を、また、そのような行ないの結果である精神的、肉体的苦痛を経験的に知ることとなり、彼はまさに「善と悪を知った」のです。けれどもヘビが約束した「神のようになる」という希望、すなわち彼が期待したものはあわれな冗談にほかなりませんでした。彼は神のかたちに創造されていましたが、そのかたちは悪の経験によってひどく損なわれてしまいました。

その上、神は人を園から「追放」しなければなりませんでした。アダムとエバは、真に悔い・改め、信仰を持っていたとしても、故郷を去って、外の未知のきびしい世界へ行くことは気が進まなかったでしょう。恐らく、彼らは再び神に会えなくなるのではないかと恐れたことでしょう。なぜなら、神ご自身の「家庭」が園にあるように思われたので、彼らは死にものぐるいで、神との交わりと保護を求めたでしょう。また、「ヒトが自分のとり出された土を耕し」、顔に汗してパンを食べる必要は、園の木のすべての実を自由に食べる快適な状態とおよそかけ離れていました。彼らが、神の退去の命令に躊躇したのは当然です。そこで神は退去を断固として主張しなくてはなりませんでした。

ここには、正当な刑罰も含まれていましたが、神が持つておられた深い理由は教育的な理由でした。彼らが罪深い人なのに完璧な環境に置かれつづけたら、すなわち、いのちの木の実を食べ、いつまでも生き続けたとすれば、悲惨なことだったでしょう。彼らと彼らの子孫は幾世代にもわたって、神と交わりのない生活と罪の真の性質とその結果を教えられなければなりません。こうして、最終的に彼らは神を救い主、造り主、

与え主として、完全に知り、悟り、愛せるようになるのです。

創世記三章八節から、原著者はアダム自身と思われませんが、著者が、「主なる神」（エホバ・エローヒム）という名を用いていることは大切です。神は全能であるとともに、創造の神ですが、また、恵みとあわれみに富む変わることはない永遠の主であり、これらの経験を通して、アダムとエバはそのような方として神を知るようになっていきました。

いのちの木への道を「守る」ために、神はエデンの園の東に輪を描いて回る炎の剣を持った二つのケルビムを置かれました。おそらく天使の最高の位置を占めるというこれらケルビムについては、エゼキエル書一章四～二八節、一〇章一～二三節、黙示録四章六～八節にもっと詳しく記されています。サタン自身、かつては、神の聖なる山で「油そそがれたケルブ」（エゼ二八・一四）でした。

詩篇一八篇一〇節、八〇篇一節、九九篇一節を見てわかるように、ケルビムは、常に神の御座と深くかわりがあり、神の臨在が特にいのちの木のところで現わされたということが暗示されています。後に、神のご臨在は、幕屋の至聖所の恵みの座の上にあらわされました（出二五・一七～二二、ヘブ九・三～五）。そして、この恵みの座は二つの金のケルビム彫像でおおわれていました。恵みの座の上に注ぐ贖いの犠牲の血を携えて、年に一度大祭司はここに入りました（レビ一六章、ヘブ九・七～一九、二四～二八参照）。

これから類推すれば、いのちの木への道を守るケルビムの間で、神は、神を知ることが願ったアダムや彼の子らと時々お会いになられたことも考えられます。